



久留米発・ニッポンのものづくり

からくり儀右衛門展

平成25年11月30日
～平成26年1月16日

わがまち久留米は、街道が交差する交通の要衝として古くから発展し、また筑後川の豊富な水は農業や工業に利用され、地域の産業を支えてきました。現在は、タイヤや靴などのゴム産業に加え、最先端の技術を駆使するバイオ関連企業などが集積、自動車産業の一翼を担う企業なども進出しています。

地下足袋の開発でゴム産業が発展

久留米が国内のゴム産業の一大拠点となったのは、90年以上も前のことです。当時、労働者の履物として使われていた足袋は滑りやすいという欠点がありました。そこで久留米で足袋を製造していた「つちや足袋（現ムーンスター）」「しまや足袋（現アサヒコーポレーション）」の両社は独自に研究を重ね、大正12年（1923）、足袋にゴム底を貼り付けた「地下足袋」を開発しました。

滑らず、軽くて丈夫であったため、全国で爆発的に売れたといえます。いずれの会社にも、倉田雲平や石橋正二郎といった、ものづくりへの工夫や努力を惜しまない企業家の存在がありました。現在は、両社ともに日本を代表する靴製造企業となっています。



写真上/地下足袋 [昭和前期ころ]

写真右/昭和初期の広告。当時の久留米の花形産業が揃う。



車社会の到来を予見して創業

自動車がようやく普及し始めた昭和6年（1931）、石橋正二郎がブリヂストンタイヤを創業し、ゴム産業は、一躍、久留米を代表する産業となります。

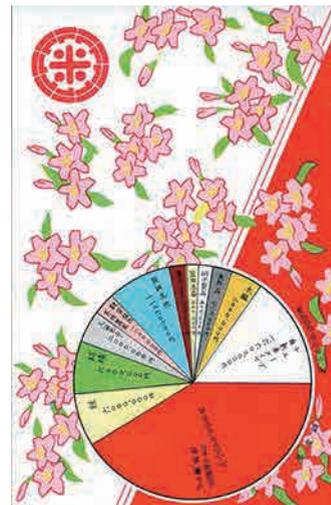
正二郎は、自動車が交通機関の主役になると予見して、自動車タイヤの完全な国産化と海外輸出を目指しました。第二次世界大戦後に本格的な生産を開始。製品の開発と改良、販売努力を重ね、同社を名実共に世界的企業へと発展させます。



JR久留米駅前にある世界最大級のタイヤのモニュメント



郷学の森に立つ石橋正二郎の胸像



久留米勸業祭記念絵葉書（昭和13年）。花形産業は餅からゴムへ。

創意工夫が生んだ名産品

このような近代産業の発展を支えたのは、江戸時代以来、久留米の産業に息づいてきた、生活の役に立つ何かを新しく生み出そうとする、創意工夫や探究の心でした。

江戸時代の終わりから明治時代のはじめ頃になると、旧久留米藩領内では、餅や城島瓦、和傘、籃胎漆器などの伝統的な工芸品が数多く作られていました。



写真右/久留米餅



水天宮七百年祭記念勸業博覧会絵葉書（大正時代）。当時の久留米の主要産業が描かれた珍しいもの。